

---

# 帝国物語外伝 ～赤髪のマザク～

不知火幻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

帝国物語外伝 ～赤髪のマザク～

### 【Nコード】

N2573W

### 【作者名】

不知火幻

### 【あらすじ】

『ある雪山に奇妙なエコーズが出現している』。主にハンターの仕事を斡旋しているギルドからの要請を受けた帝国軍第四類所属、ボタンは同じ軍所属の雲鏡と共に噂の国へと旅立つ。同じ頃、親友の恋人を探す旅に出たマザクは、かつて旅仲間であったロットからの手紙により、今いるハンターからの仕事を最後まで決めていた。様々な憎しみと愛が交差する『赤い花』の続編ここに完結。

## 前作、『赤い花』のキャラ紹介

『赤い花』の物語はデータ消失により読むことはできません。これで大体の概要はつかめると思います。（不知火幻）

### 《前作『赤い花』のキャラクター紹介》

#### 『マテリア』

【基礎データ】性別は女。髪の色は黒。瞳の色は最初は青かったが、13神の1人『レパード』の人格を吸収し、赤い瞳となる。

【性格】酒場のウェイトレスをしていたので明るい性格だが、トラウマからかゴツイ男は苦手。ヴィンセントの事が好きになってからすっかり嫉妬深くなっており独占欲旺盛。ヴィンセントの前では猫かぶつており、甘えている。ハンターの間ではすでに伝説となっている人物。

『13番目の息子』レパードと『3番目の息子』レトリックが造りだした人造人間。レパードの手下であるドールドにより母胎候補として育てられていたが、ドールドの裏切りにより外の世界へ出る。そこで酒場で働いていたものの、酒場の主人に娼婦として売り飛ばされ、処女を喪失する。そのため母胎候補（レトリックの理想では純潔な少女が必要だったらしい）から臓器のみ提供する家畜へと成り下がり、レトリックから『母体の心臓』として狙われることになる。ちなみに当時まだ名前はなかった。

ヴィンセント、ヒヤッキ、ゴードンと出会い、共に旅をしていくうちに、ドールドの死体がある『人形の館』にて出生の秘密を知る。ヒヤッキとレパードの戦闘の際、川に落ちてしまい瀕死の状態になる。

レパードの細胞が体に埋め込まれていたため、瀕死の際、レパードの力を吸収する。レパードの能力を強制的に使われ、マテリアを助けようとしたヒヤッキに力を発動させてしまう。ヒヤッキの過去の世界を知ったうえで、無事生還したためレパードに認められた。このときに自分の名前をマテリアだと決める。

ハンターであるキク、アルフ、エンジェルと出会った頃には『真紅の墮天使』マテリアとして賞金稼ぎの間では有名になっていた。「お姉ちゃん」と慕うキクに戸惑いながらも愛しさに目覚め、いつしかヴィンセントを男として意識するようになる。人のいなくなった教会で静かにヴィンセントと結婚式を2人であげた。

氷女のいる洞窟でレトリックと出会う。ファーストにヒヤッキ、レトリックにゴードンを殺害される。マテリアはかるうじてレトリックに勝利する。その時にレパードの人格を吸収した。

『2番目の息子』ファーストにヴィンセントを殺害され自暴自棄になった所を、ヴィンセントの無意識下で出てくるチャンスを得ていた『4番目の息子』ザクロに人格を強制移入されてしまう。その後、キク、エンジェル、アルフの前からマテリアは姿を消した。

数年後、もはや向かう所敵なしとなったマテリアは人の言語を理解し、言葉を話す奇妙な黒猫ミアと出会った。ミアと共にヴィンセントの育ての親であるクサナギに会ったマテリア。人に危害を加える『マルスオフ』と同じ赤い瞳を持ち、『忌み嫌われている存在』である子供時代のヴィンセントに対して、我が子同然の愛情を

持っている姿に共感し、マテリアはここに住み、今は亡きヴィンセントの代わりにクサナギのお世話をすることを決意。しかし、マテリアとミアが買物に出かけている間、クサナギの寿命が尽き、ファーストによって住む場所を燃やされる。

ヴィンセントは生きていたというファーストの言葉を信じ、マテリアは新たにロット、マザクを仲間に加え、『ロード』発生の地『瓦礫の塔』へと向かう。そこでマテリアはファーストからこの世界の真実を知ることになる。この世界は『ロード』が理想の『母』と永遠の時を過ごすために造られ、旧世界はそのために滅ぼされたのだ。神脈は『ロード』の母を……新たな生命を造るためのエネルギーとして使われていたのだった。

「この世界はロードの夢だ。もし望にもう一度会えるのなら、こんな夢、壊れても構わない」

冷静かつ穏やかな表情に隠されたファーストの『ロード』に対する憤慨。彼の目的は母胎であった高村望を再び再生することにあった。そのために母胎候補でありカラスとは違い、心臓を持っているマテリアと接触してきたのである。それが例え『ロード』と同じく愛情を求める行為であったとしても叶えたい願いだった。

ファーストから「もし再生に必要な子宮を提供するのなら愛しいヴィンセントを蘇らせてやろう」という条件をもちだされ、世界の命運を選択させられるマテリア。拒めば二度とヴィンセントには会えない。承諾すれば耐性抗体を持つ新種の『紅姫』が人類を滅ぼし、再び世界が滅ぶ。承諾したい欲求をかるうじて仲間の顔を思い浮かべ思いとどまるマテリア。しかし、旧世界を滅ぼした時のように赤

い花びらが再び空に舞い上がり、時は残酷にも刻み続けた。

選択できず、混乱するマテリアの意識をチャンスとばかり副人格であったザクロが乗っ取った。マテリアの体を使ってかつて共に新世界を構築したファーストと戦うザクロ。圧倒的な力でザクロを追い詰めたファーストだったが、『11番目の息子』クラウンの模倣の能力を使って高村望に変身した姿に隙を突かれてしまい、ザクロに敗北してしまう。

「じゃあな兄貴。この世界も、女も、俺のものだ!!」

暴虐と残虐の化身と化したザクロはマテリアの意識を支配し、世界を2人だけのものにしようとした。しかし、もしもの時のためにファーストによってミアの内在に存在するヴィンセントの人格はすでに取り出されていた。ファーストの意識が途絶え、副人格として漂流していたヴィンセントの意識が目覚める。目覚めたヴィンセントはファーストの肉体をもって、マテリアをザクロから救うため最後の戦いへと立ち向かう。激しい戦闘の末、勝利したヴィンセント。崩れていくザクロの意識に対してマテリアは手を差し伸べたが、歪んだ愛情をマテリアに持っていたザクロはそれを拒絶し、白い空間へとその姿を消滅させた。

戦いが終わり、『世界樹』のある島が崩壊しようとしていた。力尽きたヴィンセントを助けようと手を伸ばすマテリア。しかし、ヴィンセントは「会いに行く」という言葉を残したまま海の藻屑へと消えていった。

それから2年。ようやく過去の戦いから立ち直ったマテリア

はもう人の言葉をしゃべらなくなったミアと共に新しい生活を送っていた。

いつものようにヴィンセントのために造った墓へと向かうマテリア。人あまり懐かないミアが突然墓の前にいる男の元へと走った。

「神様がね 君の元へ帰ってもいいと言ってくれたんだ」

変わらない優しい笑顔で立っているヴィンセント。

初めて2人が出会ったあの真つ白の粉雪が降る町でしたように、マテリアはヴィンセントの元へと走っていた。

『ヴィンセント』

【基礎データ】性別は男。髪は黒。マルスオフのような赤い瞳をしていた。

【性格】気弱でおどおどした臆病な性格。華奢な体型をしている。基本的に人に優しいが、それは自分を攻撃されないための心理的防衛である。仲間と旅をしても信頼していたのはマテリアのみだった。なのでベツタリとくっついていて。ただ、戦闘となると大型の剣を振り回すほど強く、ヒヤッキに無傷で勝利した。それゆえか仲間から信頼されやすい。マテリアを護ることに命をかけていた。

『4番目の息子』ザク口の副人格。少年の頃、奴隷として売られ

ている所を『紅姫』の研究者だった高村望の目に止まり、ザク口の副人格として利用されることになる。しかし、本来副人格の役割であるザク口の暴走を止めることができず、ファーストと相打ちになった瞬間人格が目覚める。なぜ皆いなくなったのか理解できないまま放浪していたが、『マルスオフ』を忌み嫌う町で捕まり、処刑されそうな所をクサナギに助けられる。成人になるまでクサナギと過ごし、クサナギの病気が悪化するのを防ぐために賞金稼ぎとしてお金を稼ぎ、薬を購入する日々を送っていた。クサナギの容態がいよいよ悪くなった日に、クサナギの反対を押し切って高い賞金額の出る『王の娘』を探す旅に出る。その途中でマテリア、ヒヤツキ、ゴードンと出会い、一緒に旅をすることになる。

人々の憎しみの目を集める（当時はまだマルスオフが跋扈していた）『赤い瞳』をしていたため、差別的な扱いを常に受けていた。ゆえに、人を怖がって町に入ることは躊躇っていた。唯一自分を恐れないマテリアのみ心を許しており、妹のように接していた気持ちだが、いつしか愛情へと変わっていった。マテリアが自分と同じ赤い瞳を持つようになり、一緒に町の外で仲間の帰りを待っていたところ、副人格であるザク口の意識が活性化してくるようになる。その不安を抱えながらマテリアと静かな結婚式をあげる。

氷女の洞窟で、『王の娘』から高村望の幻影を見たヴィンセントはさらにザク口を刺激してしまいもはや暴走寸前までに陥っていた。それを見破ったファーストがヴィンセントを切り殺してしまう。

数年後、不死身ゆえミアという猫に転生し、記憶を失っているもののマテリアに魅かれ、一緒に旅をすることになる。途中、マザク、ロットを仲間にした。性格は前と比べると我侷になり、よくマザクをからかっていた。



瓦礫の塔にて、ファーストに捕らえられ、無理矢理コンタクト・リンク（副人格化）させられるもファーストがザクロに倒されたため再び復活する。しかし、人外の体を持つファーストの体はすでにこの世界に対応しきれず、ザクロを倒した後身体の崩壊が始まる。マテリアに希望を持って生きてほしいという願いを込めて、「会いに行く」という言葉を残したまま海の藻屑へと消える。

異世界に到達し、『名前を持たぬ神』に復活の証である『赤い花』を与えられ、マテリアの待つ世界に再び舞い戻り、マテリアの元へと向かった。成長したマテリアに驚きながらも変わらない彼女と共に過ごす人生を選択したのだった。

『ヒヤッキ』

【基礎データ】性別は女。熊のような体型をしており典型的な戦士タイプ。

【性格】がさつな性格で口が悪い。好戦的で力試しにヴィンセントと戦った。マテリアに対しては当時の情勢からか厳しく接していた。マテリアが強くなるとその力を認め、姉のような態度に変わった。死亡した後、預貯金はマテリアから養護施設に寄付されている。

凄腕の女傭兵。赤ん坊の頃、父親の財産目当てのために、叔父に『底のない谷』に捨てられる。運よく谷に生えた木に引っかかり、ザクロに敗れたロコの副人格・ヴィルドに谷から連れ出される。

傭兵団に拾われ、傭兵の隊長をしていた義父に剣技を教わる。自

分の出生の秘密を知り、叔父に復讐しようとして企てたが、すっかり落ちぶれてしまった叔父の姿を見て復讐をやめる。

傭兵団はマスクをした男（ファースト：人間を使って諜報活動をさせていた）が討ち取ってくれと依頼した男に壊滅させられてしまう。その時、深手を負った『5番目の息子』マルスに強制的にコンタクト・リンクさせられ、自分の潜在意識の中（副人格化）に潜り込まれてしまう。

賞金稼ぎとして放浪している頃、軍の捕獲列車に捕らえられてしまう。それはマルスを倒すために連合国が仕組んだ罠だった。マスクの男に子供の頃恋をした女性、高村望（旧世界の母体）に会えるとそのかされたヴィルドと再び出会い、ロコ（ロコはすでにザクロによって死亡しており、『死のゲーム』は自動的に動作していた）の造った『死のゲーム』へと参加させられてしまう。

『死のゲーム』において、ヴィルドに好意を持ちヒヤツキに嫉妬したケイに顔を傷つけられ生涯残る傷となった。ケイを殺し、ケイの気持ちに気づいたヒヤツキは、自分の手に染まったケイの血を見て人格が崩壊。マルスにその人格を乗っ取られる。だが、ヴィルドの捨て身の戦法によりマルスは消滅、ヒヤツキは『想い人』（高村望）の幻影を見ながら目を閉じるヴィルドに初めて自分が恋をしていたことに気づく。ヒヤツキはヴィルドの夢だったパン屋を開業することを目標に再び賞金稼ぎに戻る。

数年後、ヴィンセント、マテリア、ゴードンと出会い、王の娘を探す旅に出る。最初はヴィンセントに甘えてばかりのマテリアを足手まといだと罵っていたが、それは自分が辛い経験をしてきたゆえの愛情の裏返しだった。徐々にマテリアとも打ち解け、姉妹のような関係になる。

アルフ、エンジェル、キクと出会った時、数年前に戦闘を好むハイグラディエーターとして自分に襲いかかったアルフを警戒していたが、アルフの豹変ぶりにすっかり安心していった。

氷女の洞窟にて、ファーストと戦う。マルスの力に覚醒し、ファーストを追い詰めるも圧倒的な力を誇るファーストの前に破れる。マテリアとヴィンセントの幸せを願いながら、ヒヤッキはその生涯を終えた。

死後の世界である彼岸の砂漠にて、再び出会ったヴィルドに自分の夢を語るヒヤッキ。ヴィルドはヒヤッキの手をとり、歩き出す。ヒヤッキはそれが幻であることを知りつつも、砂漠の彼方へと一人歩いていった。

『ゴードン』

【基礎データ】性別は男。髭面で腹の出ている戦士タイプ。

【性格】おおらかで落ち着いた性格。気配りのかかせない性格で、ヒヤッキの暴走の止め役と苦勞を背負い込む。マテリアとヴィンセントの関係に対しては鈍く、ヒヤッキの方が早くから気づいていた。マテリアのことを自分の子供と重ねており何かと気を使っていた。

元小国レイクランドの兵士。兵士だった頃、サラという女性を嫁にむかいいれ、若いながらも隊長となり、ゴードンにとっては絶頂

期だった。身重のサラを1人残し、『8番目の息子』グリード率いる愚者の大軍に立ち向かう。かろうじてグリードに勝利するものの、故郷に帰ったゴードンを待っていたのはレトリックによって滅ぼされた祖国とサラのお腹に突き刺さっていたスノーフリーアの国旗だった。

復讐を誓いヴィンセント、マテリア、ヒャッキと共にスノーフリーアの『王の娘』を探す旅に出る。その目的は王の目の前で愛する者を殺すことにあった。

途中、アルフ、エンジェル、キクと出会う。アルフとはいやに気が合い、すっかり飲み仲間になっていた。

氷女の洞窟にて、復讐の相手であるレトリックと戦う。圧倒的な力を持つレトリックの前に自爆を計るも失敗する。

死後の世界である静かなる森にて、自分の名を呼ぶ子供の元へと向かい、父親として最後を迎えた。

『アルフ』

【基礎データ】性別は男。元ハイグラディエーター。軍隊の村出身。後にエンジェルと結婚。養子にキクを迎える。

【性格】容姿が良く、戦闘も得意だったためか女性に好かれやすく、すっかりキザな性格になってしまった。若い頃は100人の女を泣かせたと豪語している。今でも女性に対する接し方は変わっていない。ただ、頭が悪く未だに昇進試験を突破できないでいる。

アルフが生まれた村では強さこそがすべてであり、弱い者は容赦なく排除されていった。その村の中でも1千匹のマルスオフを殺した者をハイグラディエーターと呼んでいた。

そのためか村人の気性は凶暴であり、殺戮こそが快感へとなっていた。その村人の気質をアルフは受け継いでいた。

アルフは順調に出世していき、ついに王女の護衛という任務につくことを許された。しかも、強者にありがちなゴツゴツした顔ではなく、貴族のような顔立ちをしていたため病弱なアスカ王女に好意までもたれていた。しかし、それが王の逆鱗に触れ、アルフの立場を危うくしていった。

マルスオフ討伐の際、エンジェルに出会う。元は男だったが、薬物投与によってホルモンのバランスが崩れ、すっかり女となっていたエンジェルにアルフは一目ぼれする。アルフの行動は早く、エンジェルに会いに牢屋へと暇があれば向かっていた。その純朴さ（下心？）をエンジェルに利用され、様々な悪知恵（？）を授けられる。まずエンジェルの計画の邪魔となる、王の護衛として雇われたヒヤ

ツキを倒した。また、異常さを装い王の不信感が高まった所を、『国外追放』という条件でエンジェルを牢屋から出すことに成功した後、後にヒヤツキには悪い事をしたと反省している。

村を出る際、自分が村人達の嫉妬（王に抜擢された事による）によって意図的に村を出された事を知る。アルフが殺戮の衝動にのまれそうになった時、木陰の丘で待っていたのは自分の為にお茶を入れてくれるエンジェルの姿だった。それを見たアルフは殺戮の衝動が昇華され、エンジェルに対して深い愛情を持つようになる。それは生きるものすべてを殺すよう訓練された快感よりも遙かに尊いものであるということアルフは覚えた。そのため性欲のためだけに女と接してきた考え方をすっかり改めるようになる。

その後、キクを仲間にし、賞金稼ぎとして働いている時に、ヴィンセント、マテリア、ゴードン、ヒヤツキに出会う。

レンガの町にて、懺悔を繰り返した伝道師に出会う。伝道師はエンジェルとヴィンセントを殺せばアスカ王女と婚約できるともちかけてきた。アルフはその誘いにのり、伝道師の命令どおり、エンジェルを切り殺す。次にヴィンセントと本気で戦うが敗北する。伝道師に真実を聞かされ、気が触れ自殺したように見せかけた。しかし、それらはすべてエンジェルの計画通りであり、用意しておいた死体を自分の自殺を見せかけただけだった。こうすることによってようやく国のしがらみから解放され、ハイグラディエーターの肩書きを捨て去ることができた。

マテリアが行方不明になった後、キクを養子に迎えて住居を持つ。つまり、キクの義父にあたる。

現在は国軍として働いているが、戦闘のみ特化して育てられたため勉強ができず、昇進試験を落ちまくっている。

『エンジェル』

【基礎データ】性別は女（元は男）。魔術師。

【性格】容姿端麗で元男とは到底思えない美人。泣きボクロがあり、露出度の高い魔術着を身につけていた。性格は穏やかで女性らしい行動をとるが、たまに怒ると男の声になっていた。賢明な理知的な女性。キクのことは出会った当初から娘扱いしていた。

マルスに捕らえられた人間。元は男だったが手術して完全な女となった。『13神の力』を使いこなせる優秀な魔術師。後にアルフと結婚し、キクを養子に迎える。

マルスの牢獄から脱走し、逃げている所アルフ率いる軍隊に捕らえられる。その瞬間、エンジェルは生に絶望した。

マルスの拷問と薬物投与によりホルモンバランスが崩れ、体つきはすでに女へと変貌していた。死を望んでおり、牢屋にやってくるアルフに向かって「殺して」と呟いていた。実際、牢屋から出してやるというアルフの言葉に耳を傾けず、意固地に死を求めている。アルフが牢屋番に内緒で牢獄の鍵を持ってきたとき、アルフの告白を始めて聞いた。アルフの言葉を信じ、生に対して希望を持つようになる。牢屋の鍵をさしこんだアルフを制して、揉め事を起こさずに脱出できる方法を教え、計画は成功する。その後、アルフだけを信じて生きるようになり2人の絆はますます深まっていった。

ピンチに陥っていたキクを助け、母親のように接する。ヴィンセ

ント、マテリア、ゴードン、ヒヤッキにも出会う。

レンガの町にて、王の追跡者を警戒していたエンジェルはアルフから伝道師が現れたことを聞かされ、わざとアルフに切られる。計画は成功し、もはや王が自分達に興味がないことを知り、安堵した。

マテリアが行方不明になった後、キクを養子に迎え、義母となる。現在はダンスにはまり、運動神経だけはいいアルフを連れて貴族達と踊っている。

『キク』

【基礎データ】性別は女。剣士。『神の血脈』を持っているので、当時は両目とも赤い眼をしていた。

【性格】サバサバとしたドライな性格。仲間はビジネス相手とか思っておらず、あまり情を持たなかった。年齢相当に子供っぽい。背は低い。マテリアをお姉ちゃんと呼び懐いており、現在でも手紙のやり取りをしている。

マテリアと同じくレパードとレトリックにより造られた人造人間。聖女となる資格がなかったため奴隷商人に売られることとなった。現在でもキクにその記憶はない。

6歳の時、ダラスという男に買われることになった。髪が金髪ということで東洋の花にちなんで『キク』と名づけられた。

ダラスに剣術など生きる術を教えられ、幼少の頃から賞金稼ぎと



なる。『神の血脈』を持っていたため、常人よりも覚えが早く、小さいながらも剣術の腕は一流だった。

9歳の時、ダラスが殺される。それからは死に対して無頓着となっていく。

11歳の時、依頼主の罠にかかり、絶体絶命の状態となる。死を覚悟した時、アルフとエンジェルに助けられる。短期のつもりで2人の仲間になるが、居心地が良いためそのままいつくこととなった。

マルスオフの洞窟にて、憧れの賞金稼ぎ『真紅の墮天使』マテリアと出会う。マテリアに何か共通なものを感じたキクは彼女に懐くようになる。実際マテリアはキクの血のつながった姉になる。それゆえかマテリアと同じくヴィンセントに好意を抱いており隙あらば奪うつもりでいた。

レンガの町にて、ヴィンセントとマテリアが結婚したことを知る。2人の結婚を祝福はしたが、多少はショックだったらしい。後に不倫という方法を取ろうとしたが、マテリアに睨まれてしまい失敗に終わる。未だにヴィンセントのことは諦めていない。

氷女の洞窟にて、ヴィンセントとマテリアを守るために、決死の覚悟でレトリックの造りだした魔物達に立ち向かう。ピンチのところを再びアルフとエンジェルに助けられる。マテリア達を追って金網の塔を登りつめたが、そこにマテリアの姿はなかった。

マテリアが行方不明になった後、アルフとエンジェルの養子となる。学校に通っている時にS級犯罪者ゴキブリとカラスに会う。カラスにマテリアと似たものを感じ、彼女のことを気になっていた。後にカラスが自分達と同じレトリックの造りだした母胎である事を

知る。

マテリアから手紙をもらった時、嬉しさのあまり不眠になった。それからマテリアとは文通仲間となっている。

『マザク』

【基礎データ】性別は女。作家兼冒険者。『レッドイーター：ホーリーランス』の使い手。

【性格】赤いボブカットの髪を特徴とした自己顕示欲の強い性格。酒と煙草好き。未だ独身。

平凡な町に生まれ、平凡な生活をし、平凡に学校を卒業して役所に勤めていた。しかし、上司（妻子もち）のセクハラにより役所を辞め、職業訓練所で偶然見つけた『ハンター』（旧：賞金稼ぎ）の募集を見て応募、訓練を受けハンター見習いとして簡単な仕事を受けていた。

お金持ちの子供のボディガードをしている途中でマテリアに出会う。他の賞金稼ぎからマテリアがあの『真紅の墮天使』だと聞き、彼女と同行し自分のランクを上げようと企み、共に旅をすることをなんとか承諾してもらう。だが、その旅は決して楽なものではなく、ミアにはこき使われるわ、仲間となったロットには馬鹿にされるわと大変だった。

瓦礫の塔にて、ゴキブリに破れたロットを救おうと決死の覚悟で立ち向かう。それは平凡な人生を歩んできたマザクにとって初めての経験だった。ピンチに陥った時、外なる神、白ヤギ『ホーリーランス』の力を取り込み、ゴキブリを倒す。すべての力を使い果たしたマザクは倒れるもののその原因は前日の趣味の創作活動による睡眠不足によるものだった。

帰路にて、しばらくの間マテリアの傍にいたものの、再び冒険者として旅に出て行く。旅の途中で本も出しており、それはベストセラーとなった。マテリアとヴィンセントが無事出会ったことを彼女は知らないでいる。

『ロット』

【基礎データ】性別は男。元男娼。『神の血脈』をもつ。『13神の力：エンプネス』の使い手。

【性格】銀髪の髪をもつ。女嫌い。マテリアには懐いていた。

マルスオフと同じ赤い眼を持つがゆえに親に捨てられ、教祖と名乗る人物に拾われる。資金を得るために男娼を子供の頃からしていた。あまりの苦しさで孤独により『グリード』の力に覚醒。生命の標本から片言を話す女性と過ごす日々を送っていた。

ある日、生命の標本から現世に慕っていた女性を召喚する。それは女性の自由意志を持つことを許す行為であり、ロットとの別れを意味していた。女性が突然いなくなり捨てられたと思った幼きロットは女嫌いとなる。

教祖の命令によってレイと共にマテリアを倒しに向かうが、帝国軍のデーベルとサイモンによって過去の真実が暴かれる。世界に絶望したロットを救ったのはマテリアの『信じる』という言葉だった。それ以降、マテリアの事だけは信じるようになり、逆にマザクのごときは馬鹿にしていた。

瓦礫の塔にて、ファーストのスパイとして教祖に取り入っていたゴキブリとの戦い破れる。その時に、マザクの身を案じていたので、多少なりともマザクを仲間だと認めていたらしい。睡眠不足で倒れたマザクを背負って最後の戦いへと向かう。

帰路にて、ヴィンセントと別れたマテリアの事が心配でしばらく共に生活をしていたが、現世に召還した女性の事を探しに旅に出る。

現在はその女性と共に暮らしている。そして何故かリレイもロツトの傍にいる。「背中を切られた感謝料」としてロツト共に薬師を始めたらしい。多少なりとも好意はあったようだ。

後に手紙とともに3人で写っている写真がマテリアの元へと送られてきた。

### 『ゴキブリ』

【基礎データ】性別は男。元帝国軍幹部。S級犯罪者。『神の血脈』を持つ者。本名は不詳。年齢も不詳。

【性格】あらゆる術に精通しており、帝国軍第四類を初めて創設したとして有名。理性的な性格だったが、拷問により飢えに狂ってしまった。

『神の血脈』を持つ父と貴族の母を持つ。それゆえに人々から虐待され、暗い幼少期を送った。あまりの辛さに父親に告白すると、

父から「人間など餌だと思え」という言葉が返ってきた。

父の言葉に従い、人々の拷問により死期の近かった父を食い殺し、初めて人の味を覚えたゴキブリは家族を持つことを自ら禁止する。

成人し、母親の縁で大帝政府に就職。その精力的な活動にて幹部にまで昇進する。しかし、同僚の嫉妬から父を食い殺したことを大帝王に知られ、帝国から追放されたうえに牢獄に閉じ込められる。ファーストによりその牢獄から出された時、すでに理性的な面影はなく、変わり果てた姿となっていた。ここからS級犯罪者『ゴキブリ』と名づけられるようになった。

ファーストによりカラスの心臓を守るように言いつけられる。カラスと共に行動している内に彼女に対して情が芽生える。

マテリア達に負けたリレイを助け出すなど、普段は理性的でカラスに対しても理的に接していた。しかし、一旦飢えに狂うと判断力が低下し、凶暴化するため手がつけられなくなる。それゆえに判断を誤り、追い詰めたはずのマザクに破れ、カラスの心臓を守りきれなかった。

最後はカラスを家族だと認め、自らの使役に喰われて人生を終える。本名をカラスに教える事は最後までなかった。

『カラス』

【基礎データ】性別は女。S級犯罪者。マテリアやキクと同じく、

レパードとレトリックによって造られた母胎専用の人造人間（通称：マザー）。『13神の力：グリード』の使い手。年齢は不詳。

【性格】独占欲が強く我侷な性格。滅ぼした国の人間を復活させ女王様ごっこをさせるなど残忍な部分もある。ファーストを便宜上父と呼んでいたがあまり懐いていなかった。どちらかというとゴキブリの方を信頼していた。

レトリックとレパードによって造られた人間。マテリアという名前で呼ばれていた。唯一心臓を持たないため、ゴキブリの心臓を代用していた。

人形の館にて、名もない少女（後のマテリア）と出会う。彼女とは親友だったが、旅の芸人である若者と出て行くことしたために決裂。芸人の若者を殺し、名もない少女を独占しようとしていた。その後、レトリックによって連れて行かれ、体中を弄られ、高村望に似た女性へと造りかえられていった。それゆえに奇怪な行動が目立つようになり、業を煮やしたレトリックは彼女を氷の中へと閉じ込めてしまう。それは彼女なりの不条理な世界に対する抵抗だった。

後に、カラスを閉じ込めた氷はファーストにより奪われ、行方がわからなくなってしまう。慌てたレトリックは多額の報奨金を出し、情報を募り、ようやく探し当てるもののマテリアによって倒されてしまう。

氷から出された彼女の目の前にいたのは『2番目の息子』ファーストだった。彼に愛着を感じ、お父様と呼ぶようになる。その時にゴキブリと出会うことになる。ファーストの事は最初こそ信頼していたが、徐々にその行動が自分を利用するただけに動いていることを悟り疎遠になる。主にファーストに対応していたのはゴキブリ

の方だった。

瓦礫の塔にて、自らの名前を奪ったマテリアと戦う。『氷縛結界』を造り、『13神の力：グリード』を使い、死んだヒヤッキとゴードンを復活させマテリアと戦わせた。戦闘は圧倒的にカラスの方が有利だったが、ゴキブリがマザクに破れてしまい発作を起こしてしまふ。

最後の戦いへと向かうマテリアに『友達』だと言われ、初めてカラスは過去の楽しかった思い出を記憶から引き出す事が出来た。それは壮絶な人生を送り続けたカラスにとって唯一の救いの言葉だった。最後はゴキブリに看取られ海の藻屑へと消えていった。



## メインキャラクターの紹介

《ハンター》…一般的な賞金稼ぎ。

『マザク』

【性別】女

【年齢】？

【職種】ハンター

【特徴】赤髪のボブカットで背が高い。酒とタバコをこよなく愛する。外なる神『ホーリーランス』の使い手であり、術を発動すれば赤眼化可能。ホーリーランスの正体は白山羊で、マザクの精神に溶け込み、脳内でコミュニケーションを取ることができる。

【性格】豪快かついい加減。姉さん肌をたまに見せる。最初は実績もなく、最低ランクのハンターだったが、『真紅の墮天使』マテリア、『神の血脈』を持つロットと共にS級犯罪者ゴキブリを倒した事で一気に知名度が上がった。

『アレク』

【性別】男

【年齢】28

【職種】ハンター

【特徴】剣士。子供の頃からリデルの護衛をしていた。元貴族の

息子。リデルの父と知り合いだった縁で、リデルの家に住み着く。今はハンターをしている。

【性格】「フツ」と鼻で笑うのが癖。リデルを護衛するためにあらゆる知識を教え込まれている。緻密な戦略をたて、マルスオフを殲滅している。マザクに甘い所がある。

『リデル』

【性別】女

【年齢】27

【職種】ハンター

【特徴】長い髪をアレクに貰った赤いリボンでまとめている。白の魔道着を着、仲間の治癒を担当している。元貴族だけに教養もあり、魔術の腕はプロレベル。

【性格】しっかりとした性格だが、どこか子供っぽい女性。アレク、スタットとは幼なじみで子供の頃から遊んでいた。アレクに好意を抱いているが、アレクにその気がないので決して口には出さないでいる。

『スタット』

【性別】男

【年齢】28

【職種】ハンター

【特徴】頬に剣による傷があり、体格もよく、典型的な戦士。子供の頃からやんちゃでアレクやリデルを連れて冒険していた。帝軍

になるのが夢。

【性格】 体格の割には意外に小心。自分の将来を心配している。マザクの酒飲み相手として常につきあわされ、ベロベロになっている。リデルに好意を抱いているが、当人にその気がないのも知っている。

《帝国軍》：大帝国の精鋭部隊

『雲鏡』

【性別】 男

【年齢】 33

【職種】 帝国軍第四類所属

【特徴】 『十三神』の1人、クラウンの使い手。魔力の導魔性にすぐれた白い全身タイツを着ている。筋肉質でタイツに肉体がビツチリである。暗部を担当しており、普段は別人物に模倣し活動している。

【性格】 男気があり強引だが、以外と紳士的な態度をとる。実は名家のお坊ちやま。一人称は「我」。

『ボタン』

【性別】 女

【年齢】 27

【職種】 帝国軍第四類所属

【特徴】髪型は黒髪のポニーテール。剣帝国時代は『白薔薇騎士団』に所属。眼鏡をかけているが伊達眼鏡である。裁縫が得意。

【性格】落ち着いており、穏やかな性格。頭の回転は速い。戦いを嫌っている。男っぽい話し方をする。

《ロストナンバー》：賢帝国の精鋭部隊

『ブツダ』

【性別】男

【年齢】18

【職種】ロストナンバー『X I』

【特徴】角刈りの黒髪で肌は茶色。額につけホクロあり。一見すると宗教人。

【性格】冷静沈着な性格。常に淡々としており、感情を表に出さない。祈りを習慣としていたのでいつでもどこでも祈る。下着に執着し、自分の持っている基準に当てはまると下着（大概美人）をほしがる。人の物を盗む癖あり。

『フジサキ』

【性別】女

【年齢】19

【職種】ロストナンバー『X I』

【特徴】髪型はセミロング。白い宝石のついた十字架のネックレス

スをしている。背も高い。胸も大きめ。

【性格】大の男嫌いで体に触れられるだけで失神しそうになる。美女が大好きでその妄想は親父的である。何故かブツダに触れられても平気。逆にセクハラしている。

## 数年前のプロローグ

「ニャーニャー」

「あゝ足に絡みつくな猫！ 今お前の飯も作ってやるからさ！」  
「ニャー」

黒猫が赤髪の女の足に絡みつく。女はボブカットで肌艶、目元、皮膚共にまだ若い。釣り上がった目をしているものの、気性は荒くなく落ち着いている。

女は木でできた家の台所で朝ご飯を作っていた。一応自分とあと2人分作るつもりだ。1人は親友へ、もう1人は猫の分である。

家は町から少しだけ離れていた。丘の上の開けた場所にある。地味で目立たない造りの家だったが、この家の主人にとっては都合がよかったのだ。

「マザク……手伝おうか？」

白のネグリジエを着た若い女が台所にやってきた。背は小さく、可憐な女性だ。もう年齢的に成人しているが、まだあどけさながどことなく残っていた。

料理の匂いで充滿していた台所が、一瞬でベッドの香りに包まれた。黒猫は女に気づくと、すぐに赤髪の女から離れた。

「マテリア！ まだ眠っていいよ。私がやるから！」

マザクと呼ばれた赤髪の女は、もう自分の私服を着ていた。ネグリジエの女よりも朝早く起きたのだ。なぜなら、マザクは今日遠い旅に出る予定だからである。

「大丈夫。今日は調子がいいから」

白のネグリジエから小さな胸の谷間が見える。櫛でといたのかストレートの黒髪が朝の光に反射する。マテリアは包丁を持つと野菜を切り始めた。手馴れているのかマザクよりも上手だ。

「ニャー」

黒猫がマテリアの前でチョココンと座った。その愛らしい姿にマテ

リアは少し微笑んだ。

「待っててね。ミア、すぐにおいしいものを作るから」

ミアと呼ばれた猫は嬉しそうに今度はマテリアの足元に絡みつく。その姿を愛おしそうに眺めながらも、女の手は器用に野菜を干切りにしていった。

「悪いねえ、今日ぐらいは朝飯作ってやろうと思ったんだけど」

「いいよ。ありがとうマザク」

照れくさそうに頭を掻くマザクに、マテリアは一旦口元を止めた。

「今日、出て行くんだね」

「……ああ」

「ロットはなんて？」

「『じゃあなへタレ』だと。相変わらず口の悪いガキだよ」

「ふふ、きつと寂しいんだよ」

ロットと呼ばれた少年は、今外へ水を汲みに行っていた。マザクへ言った最後の言葉がそれだったのだ。ロットが帰ってくる頃には、マザクは旅へともう出て行っている。

マザクは苦笑した。

「気をつけなよ。あいつは一応男だからねえ。これから2人つきりで過ごすんだから」

「大丈夫だよ。ロットはそんな事しないし、ミアだっているし」

マテリアの足元にいるミアが「ニャー」と頼もしく答えた。

「でも、寂しくなるな。マザクがいなくなると……」

「……」

まな板を叩く音が部屋に木霊していた。

マザクはマテリアについて考えがよぎる。

『紅姫現象』が起きてから数ヶ月後。

多くの学者が謎とされるその現象に私とマテリアは関わっていた。

十三神の1人、『ファ スト』との戦いである。『紅姫現象』を起こし、世界を崩壊させようとした『ファ スト』を、マテリアの恋人であるヴィンセントが止めたのだ。真実は明かされることはなく、それは私とマテリア、そしてロツトの中に留めることとなったが、ヴィンセントは帰ってくる事ができなかった。マテリアは恋人の後を追おうと、幾度も自殺を繰り返した。

マテリアの自殺願望は昼夜問わずひどかった。私とロツトが体を押さえつけ、泣き叫ぶマテリアの涙をミアアが舐めてやらなければ発作はおさまることなく続いた。ミアアを抱きしめたまま泣き続けるマテリアを、私とロツトは何度見ただろう？ 自分の力では何もできないという脱力感を何度味わっただろう？ ロツトは自分を助けてくれた恩人に、何もしてやれないといつもコブシを握り締めていた。

その発作も時がたつたびにおさまってきた。それは孤独が癒えてきたのだと信じたい。もう……ヴィンセントは帰っては来ないのだから。

「おいしいー！」

「そうだろ！ 飲み屋のおやじから秘伝のレシピを聞きだしたんだ」マザクはおいしそうに食事を進めるマテリアを眺めながら、嬉しそうに笑った。ミアアが食卓の下でガツガツ自分の餌を食べている。

「お前もおいしいだろ？」

「ニヤー」

「素直な反応で嬉しいねえ。やっぱり猫はしゃべらないほうが可愛いよ」

「ふふ」

マザクはマテリアの笑顔に救われていた。この笑顔を見たのは何年ぶりだろうか。



「ねえ、マザク」

悲しそうな表情。もう何度も話し合っただはずなのに、いまだマテリアはマザクが旅立つことに否定的だ。恐らく、大切な人がいなくなっただけなのが怖いのだろう。マザクは歯を見せて笑った。

「何これで最後みたいな顔してんだよ！」

マザクはマテリアの頭をギュツとやった。

「いつ、痛い！」

「ははっ！ 痛いかい？ これが生きてるってことだよ。絶対にまたこの家に帰ってくるって！」

「本当に？」

「約束するよ！ 私を誰だと思ってるんだい！ あのS級犯罪者、ゴキブリを倒した有名なマザク様だよ！」

食事が終わり、席から立ち上がる。これ以上いると、必ず自分の心が妥協してしまう。それを振り切って旅に出なければならぬ。

マザクはマテリアを見ずに旅の準備を始めた。

「今度ここに来る時は作家になってるからね！ あのガキに言っときな！ サイン色紙とサインペン用意しとけてね！」

昨日荷造りした袋を持ち上げる。最後にマテリアに挨拶しようとしてマザクが振り返ると、マテリアは椅子に座っていなかった。いつの間にか、マザクのすぐ傍に立っている。

「マザク」

マテリアがマザクの胸に抱きつく。マザクは「おっ……」と声を漏らした。

「今までありがとう。あなたの旅の幸運を祈っています」

「……………」

マテリアが顔を上げた。マザクは泣きそうな顔でマテリアを見下ろしていた。あのマテリアがこんなにも大人だったとは思わなかったからだ。

「……泣きそう？」

「ばっ、違うよ！ ベベ別に私はなんともないよ！ まったく！」  
マテリアが「あはは！」と無邪気に笑う。ミアも「ニヤー」と笑った。マザクは涙を拭いた。

「2人して私を笑いやがって、いいかい！ 今度ここに来る時は……」

「作家になってる？」

「そう、絶対そうなってるからね」

マザクはビツと親指を上げた。

マテリアはミアの体を抱きかかえ、椅子に座った。

「バイバイ」

マザクを真っ直ぐ見つめたまま、ミアの片足を拳げると、「バイバイ」の仕草をさせた。ミアは嫌がることなく、「ニヤー」と鳴いた。

物静かな別れ。泣きながら別れるよりかはマシかとマザクは思った。

「また会おうぜ。あとロットにも……」

「作家になってるからな？」

「そう、それ。言っといてくれよ。じゃあな」

マザクはそう言つと、もう振り返ることなく、マテリアの家から出て行った。

「う……ん」

大きく背伸びをする。マザクの眼前に広がっているのは緑の敷地だった。森から鳥の囀りが耳を潤し、暖かな風が気分を高揚させる。マテリアの家から出て数歩歩けば高台の景色が見える。それは絶景だった。

「気持ちのいい天気だねえ。旅にはもってこいだよ」

マザクは大きく息を吸った。本当の所、マテリアやロットを連れて行きたいが、やはりあの状態では連れて行くことはできないだろう。なんだかロットに病弱なマテリアを押し付けたみたいで気が引けるが、自分の夢を叶えたいという欲望が勝った。本当にロットには悪いと思っている。

「悪いね。マテリア……ロット……」

実はマテリアとロットには秘密にしていることがある。それは帝軍からスカウトがきているということだ。帝国軍として力を生かさないかと交渉人がマザクと接触してきたのだ。帝軍になれば待遇も福利厚生も断然良くなる。何よりも実家にどうどうと自慢できるし、夢だった作家になるための資金も集まる。良い事づくめだ。

「良かったではないか。ために私の力を使ってエコーズを倒したのが幸せを呼んだようだ」

心の中で外なる神『ホーリーランス』が話しかけてきた。この脳内会話にもマザクは慣れていった。最初の頃は頭がガンガン唸っていたが、適応できたようだ。

ホーリーランスの正体は白山羊である。S級犯罪者ゴキブリとの戦いで、マザクは外なる神ホーリーランスと出会い力を得ることができた。赤眼化できなかったマザクでも、高度な術を発動できるようになったのである。すでにホーリーランスは恋人以上の付き合いになっている。

「それはそうなんだけどねえ……」

マザクが苦笑いする。本当はロットも一緒に帝軍になれるか交渉するつもりだったが、元帝国に反逆した犯罪者なうえに本人は興味なさそうなのでやめた。何よりもマテリアのことを護ってもらいたかった。となると、自分だけ利益を得ることになってしまう。

「なんか心に引っかかりがきちまっていけないねえ」

「気にすることではない。自らの幸せこそが優先すべきことではないか」

「まあそうなんだろうけど」

チラリとマテリアの家の方を振り返る。家は何も言わずただそこに建っている。

「……あっ！」

『 どうした？ 』

「忘れ物だよ。交渉人と会うための証明書を忘れた。あれがないと信用をなくしちまうからね」

マザクはそそくさと、マテリアの家に戻った。

「……うん？」

入口のドアの前で、声が聞こえる。恐らくマテリアの声だ。何かただ事ではない雰囲気である。マザクは窓から部屋の様子を伺った。マテリアはミリアを腕に抱えたまま項垂れていた。残った食事に手をつけていない。何か独り言をブツブツ言っている。

（マテリア……まさか発作が！？）

マザクは耳を澄ましてみた。

「……ひどい人」

呟くような声。マテリアはそう言っていた。恨みも、怒気も含まない。ただ悲しい声。

マザクは自分に対して言われているようでドキリとした。

「あなたはとも正直だから……嘘なんて絶対につけない人だから」  
ミリアが「ミィ」と声をくぐもらせる。耳に雫が落ちた。マテリアの涙だ。

「……あなたが『帰ってくる』と言うのなら、私はあなたがここに帰ってくるまで生きなくちゃいけないじゃない」

それはマテリアの恋人、ヴィンセントが最後に言った言葉。

十三神の1人、ザクロとの戦いに勝利し、海の藻屑へと消える前

にマテリアに約束した言葉。

マテリアはその言葉をずっと覚えていた。

「あなたが死んでいないのなら。私はあなたを待ち続けなきゃいけないじゃない」

待つという辛さ。ヴィンセントが死亡したとも生存していたともわからない隔壁された世界の中で、待ち続けるというのは拷問のように苦しい。マテリアの嗚咽は、永遠の牢獄に閉じ込められた囚人のように吐き続ける。

「本当に……ひどい人……」

ギユツとミリアを抱きしめる。ミリアの舌がペロペロとマテリアの頬を舐める。とめどなく流れる涙は乾く事を知らない。

「帰ってきてよ……ヴィンセント……お願い……帰ってきて」

神様にすぎる人間は、こんな気持ちなのだろうか。いるのか、いないのか、はっきりわからない者に祈るのは、こんな気持ちなのだろうか。虚構という現実の中で、耐える続ける人間とはこんなにも苦しいのだろうか。

（まったく……馬鹿だよ私は。どうしてマテリアを利用して、のし上がってやろうだなんて考えていたんだろうね）

マザクは過去に言った自分の言葉を思い出していた。それはまだマテリアと出会う前の自分。そして、未だに成長していない愚かな自分。

（最低だ……私は。仲間を利用して……自分だけ幸せになろうだなんて）

マザクは帝国の交渉人と会うための許可証を取りに行かず、そのままマテリアの家を離れた。その顔には後悔も迷いもなかった。ただ、真っ直ぐと自分の旅の目的へと歩いていく。

『 どうするのだ』

心の中でホーリーランスが問いかける。マザクは躊躇せず答えた。

「作家になる前に、ヴィンセントを見つけてだしてやる……！」

それからまた　　月日は流れていった。

## 現在のプロローグ

『胎児よ 胎児よ 何故踊る 母親の心がわかって 恐ろしいのか』  
(「ドグラ・マグラ」より)

### 大帝国。

大陸中央にある強大な王国である。1人の皇帝により多数の国が支配され、マルスオフ、エコーズが跋扈するこの時代未だ合併は続いていた。その西門を守る楼門の上に、女が1人立っていた。

腕に小鳥をとまらせ遊ぶ女は自然と微笑み、争いとは無縁のように見える。しかし、重い剣を腰に下げ、頑丈な鎧を着、その姿は戦いに行かざるえない者の姿である。

後ろに誰かが立った。腕にとまっていた鳥が飛び立った。女は静かに、後ろにいる男にここに呼び出した理由を話した。

「エコーズ討伐？」

全身白タイト姿の男、雲鏡が眉を寄せた。普段は他人にタイト姿など見せないのだが、今回は見知った女と会うだけなので魔法による『変身』はしていなかった。

エコーズとは最近になって出てきたマルスオフとは違った怪物達だ。マルスオフを操り、国々を襲っている。大帝国も例外ではなく常に厳戒態勢をしかけていた。その生態は未だ謎である。

「そうだ」

穏やかな口調だ。後ろで結んだ長い黒髪がゆれる。女は両手を煉瓦に置き、遠くを眺めた。

「いいもんだなここは。心が洗われる」

微かな朝の光が町を照らす。白い鳩が空へと飛び立った。優しい

風が2人の頬を撫でる。

「気がしれんな。こんな朝早くから。それよりさっきの話の聞かせろ」

「せかすなよ」

女は眼鏡を直すと口を開いた。

「最近ハンターギルドから変な噂を聞かないか？」

「噂？」

「有名なハンターが、行方不明になった」

「有名？ ハンターごときに有名なんてあるのか？」

相変わらずの差別発言。会見にはむかないタイプだなと女は思った。

「実績の高いハンター達だったらしくてね。これ以上貴重な人材を失いたくないんだと。ギルドからの要請」

ハンターギルドとは依頼主から仕事を貰い、その仕事をハンター達に与える言わば仲介業者のような存在だ。仕事内容は様々で、犯罪者の捜索からペット探しまでどんなものも請け負っている。

ギルドでは資格があり、検定試験により1st〜10stと細かいランク付けされている。ランクが上がるたびに依頼料が上がるというシステムだ。今回行方不明になったのは2st〜4stと上位クラスのハンターのようなようだ。

「ふん。それならばギルドで解決すればよかるう。軍が動くことではない」

雲鏡は気性が荒く、問題の多いハンターを嫌っているためまったく乗ってこない。

「残念。ギルドでは解決できないから軍が動くのさ。軍だつてギルドから結構な上納金は貰ってるからね。ただ慎重を要する仕事であることは間違いない。ハンター達はギルドの依頼ではなく個人で動いていたみたいだからね」



「……やれやれ」

そんなことだろうと大体の予想はしていたのだろう。雲鏡は首を横に振った。眼鏡の女は雲鏡の反応を確認するとまた視線を下界へと移した。

「ハンター達の痕跡を追っていくと皆北西の方向へと向かっている。大陸のちょうど真ん中に位置する大帝国よりも上の国といえば賢帝国だが……」

「大方拉致されたのではないか。あそこは不正な人体実験の宝庫だからな」

もはやお手上げといった状態だ。

「最初はそうだと思ったが、位置が違う。それに……状況はさらに悪いようだ」

「悪い？」

「ああ。 エコーズが絡んでいる可能性が高い」

「……なるほどな」

雲鏡はようやく最初に言われた言葉の意味がわかったようだ。

「しかし下賤な……なぜそのハンター達の雇い主に直接問わんのだ？」

「ハンターの雇い主は一国の王だ」

「王が？ それは国家の問題なのか？ ならばなぜその国の軍隊が動かない」

「さあね。それも謎だ。もしかすると軍を動かす必要がないと思っているのかもしれない。もしくは動かせないからだ」

意味深な言葉だ。女は何かよからぬ事が起きそうな予感がしている。

「とにかく、奇妙なエコーズらしくてな。その調査をお前に頼みたい。ギルドは直接仕事を受けたわけじゃないから動けんとのことだ。まっ、本音は仕事内容がやばそうだから軍にまわしちゃおうってい

うのが見え見えだけどね」

「だが討伐は対象外だ。他の戦闘向けの死帝に頼めばいいのではないか？」

死帝とは『帝国軍第四類』と呼ばれている精鋭部隊の略称である。強力なエコーズを討伐するために組織された。全員『赤眼化』と呼ばれる高位魔術を扱え、戦闘能力は群を抜いている。雲鏡も女もその部隊に所属しているが、主に暗部活動専門で戦闘は他の者に任せていた。

「だからさ、今回は私がお前と行く事にするよ。パートナーとしては不足ないでしょ？」

女が少し笑う。しゃべり方といい、立ち振る舞いといい、ほとんど男のようだがこういう時だけは女らしい。雲鏡はすぐ目を細めた。「何を冗談を言っている。ボタン。お前が現場に行く必要などない。我だけで十分だ」

雲鏡はクルリと踵を返した。

「おっ、おいおい。まだ詳しい情報を教えてないだろ」

「もうよい。我は寒いのだ！」

「………タイツの上に何か着てきなさいよ」

ボタンは慌てて雲鏡の後ろを追いかけていった。

## 1 - 1 ロットのその後

《マザクがマテリアの元を去って数ヶ月後》

あの人の後姿を最後に見たのは。

いつだっただろう。

もうすぐ朝だというのに、星が輝いていた。季節によって変わる星はいつも見えていて飽きない。今日も夜風が気持ちいい。

「……………」

小屋から外に出て行くいつもの場所に行く。すると、やはりあの人は自分で造った木のブランコに揺れていた。その膝元には黒い猫が小さな寝息をたてている。

「風邪をひくよ。マテリア」

できるだけ声を抑えて話しかけた。胸に広がる衝動を抑えるためだ。ドクドクと耳元まで心音が聞こえる。この音がマテリアの耳に届かないか心配になる。

「ちよつと外に出たくて」

僕の方に振り向くと、悪戯が見つかった子供のように舌を出す。手は常に猫のミリアの背中をなでている。マテリアの肩にそつと毛布をかけてやる。

「ありがとう」

マテリアはまた空を見上げた。そこには幾千という星が輝いてい

た。あの星の中に、マテリアの想い人がいるのだろうか。

「マザクの奴、結局証明書取りに来なかったね」

何を話していいかわからず話題を探す。

「ほんとうしよもない女だ。絶対慌てて取りに来ると思ったのに僕の予想は外れたよ」

「ふふ」

笑ってくれた。それでももう満足だった。

「マザクはそそっかしいからね。……無事ならいいけど」

「大丈夫だよ。ああ見えてもあの女はしぶとい」

「だね」

それで良かった。今日はもうこれ以上何も話したくなかった。マテリアとはこんな関係でよかった。

「ねえ、ロット」

「うん？」

「あなたの探してた女性 見つかったそうだね」

「……………」

沈静化した心臓が再びドキドキと動き出す。

「なぜ……それを？」

「ギルドの人から聞いたの。どうして私に教えてくれなかったの？」

マテリアは後ろを向いたままだ。責めてはいない。

「そうか。あのおっさん余計な事を……………」

「ごめんね……………ただもうあれから何週間もたってるって言うから」

ゴソゴソとマテリアは懐を探った。そして何かを取り出した。

「これ、船のチケット。場所はわかるでしょ？」

「……………マテリア」

「会いたがっているのがわかるよ。ロット。動きが拳動不審だもの。会いに行つてあげて」

「マテリア……………違う」

「いいよ。私の事は大丈夫。もう大丈夫だから」  
「マテリア！」

我慢ができずマテリアを後ろから抱きしめる。肩から毛布が落ちた。突然の事にマテリアは驚いて息を止めた。

遠かったマテリアの匂いが濃くなった。手から体温が伝わってくる。マテリアの胸から振動が伝わってくる。

「僕は諦められる！ あの人の事を！」  
それは本気だった。

「マテリアといっしょなら、諦められる！」

嘘じゃない。

マテリアと一緒にならあの人の事を忘れられる。

「……ロット」

「だから……マテリア」

僕と。

「駄目だよ ロット」

ミリアが目を覚ます。「ニャー」と一声鳴いた。

「行ってあげなきゃ」

マテリアの手が、抱きしめていた腕に触れる。

「だって」

振り向いたマテリアは、優しく笑っていた。その顔がすぐ近くにある。全身の血液が顔に集まり、真っ赤になる。

「だって ロットの事を待ってるよ」

その一言が燃え上がった欲望を冷ましていく。  
待っている。

あの人が。

僕の母さんが。  
僕を。

「待たせちゃ駄目。ロット、行って」

力強い断定の言葉。マテリアの意思は変わらない。

「いつ！ 痛っ！」

ミリアが腕を引っかいた。タイミングの良さはワザとしか思えない。

「ふふっ、ミリアもそう言ってるよ。ねっ？」

「ミャー」

笑っているように見える。こんなに愛想のいい猫だったか。いや、お節介な猫だったな。

「ほらっ、行きなさい。グズグズしてたら、もう会えなくなるよ」

心が軽くなっていく。いつマテリアに言おうか考えていた。けど、マテリアを置いていけなかった。

「マテリア、僕は」

「ありがとうロット。その気持ちは嬉しいよ。だけど、私はあの人を待ってるから。また遊びに来てよ。その人連れてさ」

「……わかった。必ずまたここに帰って来るよ！」

「うん」

チケットを受け取るとすぐに家に入り、準備を始めた。マテリア、マザク、ミリアの写った写真も荷物の中に入れた。走れば朝出航の船に間に合うだろう。

「マテリア！」

「うん」

「……行ってくる」

深々と頭を下げる。マテリアは「いつてらっしゃい」と言ってくる

れた。

「ニヤー」

「馬鹿猫！ マテリアをちゃんと護ってるよ！ 良い飯食わせてや  
ったんだからな！」

「ミー」

ミーアは了解と返事したようだ。

「頼んだぞ！」

大きく手を振るとその場を離れた。

マテリアは僕が見えなくなるまで手を振ってくれていた。

山の間から微かだが、朝日が見え始める。

必ず帰ってくる。

そう。

その時は神様に誓って嘘じゃなかった。

\*\*\*

あれから数年過ぎた。

マテリアの元へは結局帰らなかった。

それにはきちんとした理由がある。

「……今日も綺麗に咲いたよ」

大型犬であるシベリアンハスキーのギンが、従順にお座りをして主人を待っている。僕は十字の墓の前で紫色のラベンダーの花を差し出した。

「あなたが育てた花は、あなたに似て綺麗な花を咲かせてくれる」  
僕はお墓の木に額を当てた。暖かな風が吹く。後ろではお墓の前に差し出したラベンダーの花畑があった。それが一斉に片側へと揺れる。遠くで山々が唸っている。空はどこまでいっても真っ青だった。

ヒラヒラと1匹の蝶が、墓の前に供えつけた花に止まった。

「また来るよ」

お墓を離れるとギンを呼んだ。ギンはしっぽを振って僕の元へとやってきた。

マテリアと別れた後。

探していた母の元に向かい、何のトラブルもなく会う事が出来た。あの人はラベンダー畑で水をやっていた。あの白い雪が降る夜、僕を撫でてくれた姿そのままだった。

一瞬、何て声をかけようか迷った。別れてからもう何年もたっている。あの帝軍達の話だと僕が無意識に造りだした魔力の人形だと言っていた。けどラベンダーに嬉しそうに話しかけるあの人は、倒れたまま動かない人形とは違う。マテリアに告白する前以上に心臓が高鳴り、手には汗が流れた。

あの人がこちらを向いた。僕は恐れた。またあの時のように拒絶



されるのではないかと。あの人は僕が嫌いになったから捨てたのだとずっと思っていた。だから会ったら一言『別れ』を言ってやるぐらいの覚悟だったのに、その信念も消沈している。

口を開けた。あの人は目を丸くしてこちらを見ている。名前を……名前を呼ばないと……。でも……。どんな名前だったか忘れてしまった。

「バウツ！」

いきなり後ろから何かが飛びかかってきた。すっかり油断していたのでそのまま押し倒される。それは犬だった。特徴のある模様なのですぐに犬種がわかった。

「ハツハツ！」

犬は僕の顔をペロペロ舐めた。やめると何度呼びかけても犬は止めなかった。くすぐったくて笑っていると、いつの間にかあの人は僕の前に立っていた。

細い眉に痩せた頬がくつきりと見える。唇は赤く、目は大人の女性と同じように細い。髪はボサボサで、手は乾燥したのかボロボロの皮膚をしていた。それでも、別れる前とまったく変わらない。いつまでも若く、美しい。

『ロツト』

静かな声。大人びていて透き通っていて……。暖かい声。懐かしさに犬に舐められていることも忘れ、不覚にも目頭が熱くなる。

『元気ダツタ？』

あまりにも平凡で普通の掛け声。何年も会っていないというのにまるで時間が止まったようだ。捨てた恨みよりも自分を覚えていてくれた喜びが勝り、目にジワリとしたものが溢れ出してくる。それを犬は見逃さず舐めてくる。

『ホラッ、見テ』

あの人は両手を広げた。一斉にラベンダーが揺れた。濃厚な匂いに、太陽に反射した輝きがあの人のお美しさを際立たせる。無邪気な少女のようにクルリと1回転するとあの方は笑った。

『アナタが見たいッテ言ッタカラ。何年モカケテ育テタ』

その言葉が救いだっただ。

確かに、僕はあの人に花が見たいと言った。  
はつきりと思いつ出した。

あの人は頷いて笑っていた。

『ロツト。綺麗デシヨ？ アナタが好キナオ花』  
我慢ができなかった。

子供のように大泣きして、胸に飛び込んだ。

胸の中で泣くと僕にいつもしているように、頭を撫でてくれた。  
男娼だった時、客が取れず、親方に殴られ泣いて帰った時も撫でてくれた。

何も、母さんは何も変わっていなかった。

『ヨシヨシ』

「さっ、帰ろうか？」

「バウッ」

僕の母さんはもういない。

十三神の魔力から造りだした人間の寿命は元々短いらしい。僕があの人とようやく会えたあの日まで、生きていた事が奇跡だと専門家は言った。……マテリアの言う事を聞いておいて良かったと思っている。

別れは突然だった。

一緒にラベンダー畑の手入れをしていた時だ。急に倒れ、そのま

ま寝たきりとなった。これからずっと一緒に過ごせると思っていただけにショックだった。

近くに昔仲間だったリレイがいたので、頼み込んで来て診てもらった。もう長くはないと知った時、動揺して大声で泣き喚いてしまった。リレイの平手が頬に来るまで、冷静さは保てなかった。リレイは「あなたがしつかりしないとあの人だって安心できないでしょう！」と怒鳴り返してきた。

ようやく会えたのにすぐにお別れだと聞き、呆然と僕は母が寝ている部屋へと向かった。

部屋に入ろうとした時、あの人は鼻歌を歌っていた。

軽快で楽しそうな歌だ。

意図がわからず、僕は扉を開けた。

風で揺れるカーテンの傍で、あの人は言ってくれた。

『ロット。先二行ツテルネ。アナタノ好キナオ花。マタ作ツテ待ツテクルカラ。楽シミニシテテネ』

また僕は号泣してしまった。母さんに頭を撫でられた。

『ヨシヨシ。泣カナイ泣カナイ』

僕のために母さんは動いてくれていた。もう恨みなどなかった。ただ、別れる事が辛すぎて泣き続けた。

最後に　母さんとリレイの3人で写真を撮った。その後、母さんはベッドの中で楽しそうに目を閉じ、そのまま開くことはなかった。無邪気な子供が遊び疲れて眠るようだった。

ラベンダー畑は今でも花を咲かせている。あの人の想いを潰やすことなどできなかつた。ここで自分の命が尽きるまで、花を見守っ

ていきたかった。だから……マテリアの元へは帰らなかった。マテリアへの手紙にそう記した。

今住んでいる家は新しく建てたものだ。母が住んでいた家は元は家畜を飼っていた古い小屋だった。それを改造してここまで造りあげた。

家の煙突から薬の臭いがプーンとする。ギンが嫌そうな顔をした。その顔に笑うと、家の扉を開けた。

「おかえり」

ゴリゴリと薬草を搗り合わせているリレイの姿があった。また変な薬を作っているようだ。

草のシミがついたエプロンに、長袖、長ズボンとボロボロになった作業着を着ている。口にはマスクをしていたのかくつきりと跡が残っている。この草の臭いにも慣れた。リレイはあまり女らしい格好には興味がないようだ。まあ昔からだ。

リレイは母の治療以来ずっといる。一度もう来なくていいと言ったら、「背中への傷の慰謝料です。ここを職場として使わせてください」と言って居ついてしまった。確かに昔リレイの勝手な行動に、背中を剣で切りつけてしまったという罪が僕にはある。それで何も言わないようにしたらどんどん荷物を持ってきて、この家の半分はリレイの物になってしまった。

だけど奇妙な話だ。リレイの水浴び姿を偶然目撃した事があるが、背中の傷はもう治っていた気がする。水浴び姿を見られたリレイは、線の細い体の割には白肌で豊かな胸を隠し、ジッと睨んだまま何も言わなかった。結局聞けなかった。それにしても悲鳴1つ上げず、文句1つ言わないリレイがちよっと不気味だ。

「お墓参りは終わりましたか？」

リレイは誰かを確かめることなく、淡々としている。

「ああ」

本当に愛想のない女だ。ちよっとは気遣ってくれてもいいだろうに。だけど、彼女のおかげで母を看取れた。だから何も言わない。

「今年も綺麗なラベンダーが咲きましたね」

「まあな」

「少し疲れました。肩もんでください」

大人しくレイの言う事を聞く。実際立場としてはレイの方が上だ。彼女は薬師で腕が良く、家の収入の半分以上は彼女のおかげで成り立っている。

「ここか？」

「そうです。気持ちいいです」

「ここか？」

「そうそう。強くしないでください。ロットは力が強いので」

昔とは立場が逆転してしまった。組織にいた時はやけにオドオドした女だと思っていたのに。まあ、戦闘となると人が変わったように好戦的にはなっていたけど。少し悪戯心がくすぐられた。

「これでどうだ？」

「いつ！ 痛いです！」

「ははっ、効いただろ？」

「わざとやったのですね！ 痛かったです！ ギンの餌代とか誰が稼いでいるのか考えてください！」

「ごめんごめん」

「……まあ、いいですけど」

レイはふざけてても謝るとすぐに許してくれる。その所は寛容なようだ。レイから離れ、椅子に座ると机の上に置かれてある手紙を手を取った。

『 親愛なるロット様へ

待ってな。すぐに行ってやるよ。上等な酒用意しときな！

マザク』

手紙にはそう書かれていた。

「返事きましたね」

リレイが薬草から作ったお茶をもって隣に座った。母がいなくなつてから最近リレイはやけに慣れ慣れしくなってきたが、あまり気にならなくなつた。長く彼女と居すぎたせいもあるかもしれない。

「ようやくだな。まあ生きてて良かったよ」

ギルドに僕からの手紙を提出した時は、長い時間がかかるだろうなど思っていた。それがすぐに返事が返ってきた。どうやらギルドを利用してまだハンターをやつてゐるらしい。ハンターの資格登録をしないのは、有名すぎて何かと大変だからだろうと想像している。手紙にはマテリアの現状を報告してある。マザクの心の負担を軽くするためだ。今頃飛び上がつて喜んでいるに違いない。

「これでマザクも危険な旅を止めて好きな創作活動に集中できるだろう。あいつの夢だったからな」

「マザクって人。女性ですよね？」

「うん？ 間違いなく女だ。乳がでかかったからな」

「ロツト」

リレイが細い目でコチラを睨んでくる。なんだ？

「どういう関係ですか？ 教えてもらえませんか？」

「言つただろう？ 昔一緒に旅をした仲間だ」

「それだけですか？」

「他に何かあるのか？」

「……まあいいです」

リレイの態度がよくわからない。マザクの話をするとうすぐ嫌な顔をする。女というのは謎だ。

「それにしても、幸せそうですね」

リレイが机の端の方に置いてあつた写真立てを手に取つた。それ何かの間違いであつてほしい写真だ。目に入ると痛みが増す。

「この人がマテリアさんで、隣にいるのがヴィンセントさんですよ？ いいですね。私もこんな花嫁衣装着てみたいです」

「……その男の」  
「はい？」

「その男のどこがいいんだ……」

ドヨンと暗い空気が漂った。そう。その写真はマテリアとヴィンセントとかいう気弱そうな変な男が写っている写真だ。しかも、後ろには『結婚しました』というメッセージまでついている。……嘘であってほしい。

2人は一緒に並んで立っていた。マテリアは純白の花嫁衣裳を着ている。ヴィンセントとかいう男は花婿姿で眼鏡をかけている。2人はお互いの手を取りあい、宙には紙で作った花びらが舞っていた。……まあこの結婚方式を見る限り、男の収入は安定しているといっ  
ていいだろう。

ヴィンセントの顔は柔和で気弱そうな男だ。確かに背も高いし、顔は僕ほどではないが良い男だと思う。だけど何か覇気がないし、マテリアには似合わない。つまり、女々しいのだ。

「こんな男にマテリアはどうして」  
マテリアの好みがこんな男だったとは本当にショックだ。

「良い男ではないですか。私には優しそうに見えます。だから針を持ってきて男の顔に刺しても呪いはかからないと思います」  
ぐっ……。余計な所をリレイに見られている。

「刺してない……」

「でも刺そうとしましたよね？」

「……お前なんて嫌いだ」

「残念。私は好きですから相殺されます」

「意味がわからん」

「……鈍感」

「なんだよ」

「特に」

自分から仕掛けておいて、不機嫌そうに写真を机に置く。本当に女はわからん。

マテリアに関しては本当にあの時押し倒しておけばよかったと後悔している。そうすればこんなチンチクリンな男にマテリアを取られることはなかった。まさかマテリアの想い人が本当に帰ってくるとは思わなかった。あの崖から落ちたのだから確実に死んでると思っていたのに……。どうしてあの時男として行動に出なかったのか後悔で頭が痛くなる。

「……それをすればマテリアさんに確実に嫌われていると思いますけど」

「なっ！？ 僕は何も言っていないぞっ！？」

「独り言、聞こえてましたよ。その癖を直すのをお勧めします。昔と変わらないですね」

「マザクとマテリアには言うなよ」

「言いませんよ。くだらない。大体マテリアさんの事好きなら今からでも会いに行けばいいじゃないですか」

「……できない」

「どうして？」

「できるわけないだろ。もうマテリアはこの男のものなんだ。会えるもんか」

男の意地というやつだ。マテリアの元へ帰らない最大の原因がこの男である。マザクに言えば確実にネタにされるから絶対に言わない。

「男の気持ちはわかりませんね。もしかしてマザクって人に頼んでマテリアさんの状況を探ってもらおうとしていませんか？」

「なっ！？ どうしてわかったんだ！？」

「……本気だったのですね。こんなことで呼び出されるマザクって人も不憫ですね。子供みたいに拗ねてマテリアさんの所に行けないなんて」

「……………」



「ギン。あなたは駄目ですよ。主人みたいになつては」

「ワオ〜ン」ギンがリレイの元へと向かった。そして2人して僕を遠目で見つめている。……ギン、いつの間にリレイに飼いなさられたんだ？

「はあ、ちよつと出てくる」

「どこに行くのですか？」

「酒だよ。予約してた酒が今日くるはずだ。取りに行つてくる」

「……………」

リレイが物ほしそつに見つめてくる。この場合は一緒に行きたいというサインだ。最初はわからなくて無視していると部屋に引きこもつたまま出てこなかった。最近ようやくリレイの行動がわかり始めた。こんな行動は昔組織で働いていた時はなかったと思う。

「その作業着のまま来るなよ。着替えてから一緒に行こつ」

リレイの顔がパツと明るくなった。

「仕方ないですね。お供しましょう」

また急にはしゃぎはじめた。本当に女は……止めよう。

「ギン。行くぞ」

「バウツ！」

ギンも尻尾を振つてはしゃいだ。所詮犬だな。

「……………」

机の花瓶の横に置かれた写真立てに目を移す。そこにはマテリア、マザク、ミア……昔旅をした仲間の写真が写っていた。確か同じ写真をマザクも持っているはずだ。赤い髪で快活に笑つマザクを見て鼻で笑つ。

仲間……か。どちらかという战友だな。

今でも思い出す。ゴキブリに深手を負わされ、ピンチに陥つた時、あいつははつきりと言つた。

『そこで静かに寝てな。あとはこのマザク様が全部片付けとい

「やるよ」

明らかに膝がガクガク震えてたな。臆病な女だったがアレ以来戦闘も平気になったようだ。人は変わっていく。いつまでも昔のままじゃない。

もし、マザクが自分に会ったらなんて言うだろう？

写真よりも背が伸びた。銀髪も少し長くなったかもしれない。顔つきも昔以上にキツくなった。ただ、目つきは優しくなったとリレイに言われるようになったな。ふふっ、アイツの事だからからかってくるかもしれない。

「フンッ、早く来いよ」

写真立てのマザクに向かって言うと、部屋を出た。

……ピシッ。

ロット達が出て行った後、写真立ての横に置いてある花瓶が自然にヒビが入った。ヒビから水が飛び散り、一滴がマザクの顔に当たった。

それは血のようにトロリとマザクの顔から落ちていった。

## 1 - 2 S級犯罪者

クレイク刑務所。

大陸海側に建築されたこの刑務所では、各国凶悪犯罪者が投獄されていた。1区間に24の独居房があり、鉄格子にて犯罪者を閉じ込めている。日当たりが悪く、換気もひどい。そのためか、犯罪者の多くが精神を病んでいるが、今日は悪い意味で活気づいていた。  
ジュル……ジュル……ジュル……。

地下牢の闇から不気味な汁音が聞こえてくる。牢屋に入っている犯罪者達は隅でガタガタと体を震わせていた。湿気が囚人達をヒヤリと包んだが、恐怖から出る汗を止めることはできなかった。囚人が「ひっ、ひい」と恐怖のピークに達し、小さく叫んだ。

「うるさい。もしまた声を出したら食べちゃうからね」

兵士の格好をした男が、悲鳴を上げた囚人を睨んだ。その兵士は囚人達を逃がさないための見張り役だったはずだ。囚人は「ごっ、ごめんなさい」と隅へと引っ込んだ。

ジュル……ジュル……ジュル……。

「ナメクジ」。もうちょっと静かに食べられないのかよ。まったく」  
兵士は頭を掻いた。兵士のいる牢屋では地獄が広がっていた。全身に溶解液をまとった太った男が、牢屋に入っている囚人を溶かしている最中なのだ。ナメクジと呼ばれた男は「アハ、ごめん、イモムシ」と呂律の回らない声で答えた。太った腹には囚人の腕と足が飛び出している。もうかなりの部分溶かされたようだ。

「おっ、お前等はなんなんだよ」

囚人がガタガタ震えながら、口を滑らせた。兵士は後ろをチラリと振り返りニヤリと笑った。

「覚えておくといいよ。僕達はお前達より崇高な存在だ。まあこの名前は少し気に入らないけどね」

「知ってるぞ。その名前。人の名前と呼ばれない者。 S級犯罪

者だ」

名前の意味を知っている囚人が絶望の声を上げた。

S級犯罪者とは犯罪等級最高にして最悪。全員人の名ではなく罪名で呼ばれている犯罪者のことだ。罪状は国の致命的な破壊、貴族や王族の殺害、町や村の破壊など、常人では考えられない犯罪を犯している。

「S級犯罪者！？ そんなの存在するのかよ！？」

「嘘だろ！ 何でこんな所に……」

囚人達がざわめき始めた。「あゝあ、せつかく生かしてやろうと思ってたのに」とイモムシが額に手を当てた。

「グフツ！？」

「おわっ！？」

「ひっ！ ひいつ！ ぐええ！」

牢屋に阿鼻叫喚の悲鳴が上がる。ようやく悲鳴が止んだ時には、立っている者はいなくなっていた。人の息遣いが聞こえなくなり、呼吸による空気の澱みが消えた。

「これだから皆殺しにすればよかったのだ」

全身を鎖でしばられた両腕のない男、オムカデが漬けていない右目でイモムシを睨んだ。ジャラジャラと唸る無数の鎖には囚人達の赤い血がベッタリついている。廊下の溝から赤い液体が伝っている。

「短気な王様だな。もっと人の恐怖を楽しむ心を持たなきゃ」

イモムシは両手を広げて平謝りした。囚人達は皆、先の尖った鎖で全身を貫かれ、絶命していた。いや、1人だけ生かされていた。

老齢の囚人は壁を背に座っている。顔は深いシワが刻まれ、細長い両腕と両足が地面に投げ出されていた。呼吸をするのもやっとな

のか必死で胸を上下させている。

「……お前達は、死神の使いか？」

「いいや。違うねえ。どちらかというと僕達は正義の味方だ」

「正義？ これだけのことをしておいて」

「正義と悪は違うつてのかい？      どちらも暴力じゃないか」

「……目的はなんだ？」

その囚人は深いシワを寄せてイモムシを見上げた。イモムシは男に写真を見せた。その写真には赤い髪をした女が写っている。

「こいつは……」

囚人の顔が変わった。目が怒りで大きく開く。

「お前達の組織を潰した張本人だ。こいつの名前は『マザク』でいいんだよね？」

「ああ、間違いない。奴らのおかげで教祖様は処刑されたのだ」

「間違いないつて。やはりこいつが赤髪のマザクだ」

イモムシはオオムカデに写真を見せた。オオムカデの右目が細くなっていく。

「……あれから何年もたっているはずなのに見た目が変わっておらん。これも外なる神の影響か？」

「かもしれないね。つたく苦労したぜ。この女、ギルドに登録してたはずなのに抹消申請出しやがって。おかげで居場所ならともかく顔すらわからないなんてとんだ重労働だ。これならペット探しの方がマシだよ」

イモムシはようやく探していた人物の手がかりをつかめたので、

「はあ……」とため息をついた。

「仇を、お前達は仇をうつてくれるのか？」

「ああ？      誰が少年大好き教祖様の仇なんてうつものか。帝軍のスパイが入り込んだことにも気づかない阿呆なんて必要ないんだよ」

イライラが蓄積していたのか、イモムシの顔が醜く歪む。

「信者の集客と邪魔者の暗殺がお前達の仕事だったつてのに、こっちに仕事回ってきたじゃないか！      証拠隠蔽とお前達の繋がりを

消すのにどれだけタダ働きしてやったとおもってるんだ！ あんな  
どうでもいい小娘ごときにやられやがって！」

「ということは……お前達はラピスの！」

囚人の表情が怒りへと変わった。

「貴様ら！ よくも我等を見捨てたなっ！ どうして我等を助けて  
くれなかった、ぐふっ！？」

「……うるさいんだよ」

イモムシの足が囚人の顔面へと振り下ろされた。「ゴツッ！」と  
頭が岩に当たる。イモムシは冷たい視線を囚人に向けた。

「わかってんのか！ このゴミが！ ゴミが！ ゴミが！」

「ドゴッ！ ドゴッ！」と蹴りが囚人の顔面へと何度も、何度も  
振り下ろされた。

「やめる。もう行くぞ」

オオムカデが止めるまで暴行は続いた。イモムシは「はあはあ……」  
と息を切らし、蹴りを止めた。蹴られた囚人は鼻から血を出し、気  
絶していた。

「ナメクジ。そいつを溶かしておけ」

「アハ、いただきます」

ナメクジは呂律の回らない返事をし、口を大きく開けた。その口  
は自分の体を丸呑みできそうなくらい広がった。気絶している男は  
悲鳴すら上げられず、口の中へとおさまっていく。

「チッ、お前がたまに羨ましく思うよ」

イモムシがナメクジの恍惚とした表情に嫉妬した。

「すぐにここから出るぞ」

「慌てなくてもいいんじゃないの？ こんな刑務所。人材不足なの  
か数が少ないし、見張りの兵士はコイツだけだったぜ？」

自分の体をゴソツとイモムシは叩いた。外見は刑務所勤務の兵士  
だったが、中身はイモムシのものだった。つまり、イモムシが兵士  
の中身をすべて食べ、人の皮と体に乗っ取ったのである。

「マザクは待つてはくれまい。また見失うとやっかいだ」

「はいはい、そうでしたね。そういえばこの女の目的聞くの忘れてたな。なんでコイツ旅なんてしてんだろうね？ それにヴィンセントって奴の繋がりもわからないし？」

「そんなことはどうでもよいことだ。 我らの計画を邪魔する者は消すのみ。ただそれだけのことよ」

オオムカデはジャラジャラと鎖を鳴らしながら牢屋から出て行く。「はいはい。せっかちな王様だねえ。まあこの女。年の割りには綺麗な体してるから『次の体』としてはアリだな」

イモムシがマザクの写真を手にして、ペロリと舌なめずりをした。

「内臓……全部出さないとね」

### 1 - 3 死からの誘い

『……うん？』

目が覚めると見た事もない空があった。

薄い鮮血の雲に闇に包まれた空。

その中心に白い球体が浮いている。

『月？』

最初はそう思った。

だが、それにしては近すぎる。

凸凹とした地表がはつきりと見えるということとは、相当地上に近い。

それにこんな白い月など見た事がない。

『う……ん』

昨日は何をしていたっけ？

思い出そうとすると激しい頭痛がした。

水でも飲もうと体を起こすと、部屋の奥は地平線まで広がっていた。

『……………』

ポケットと遠くを眺める。

どこまでいっても透明な水が広がっている。

水の深さは1メートルあるだろうか。

地表が目視で見える。

その地表は血よりどす黒い赤でできていた。

血管のような管が水の底に張り巡らされている。

『なんだい……ここは？』

はつきりしない頭で考えてみる。

昨日は……昨日は確か仲間とあと誰かと酒飲み競争をしていなかった。

体が揺れた。



いや、違つ。

体が揺れたのではない。

乗っている小船が揺れたのだ。

『どうして……私は』

小船の中にいるのかと自分に問う前に、船だと思つた物が棺桶だと気づいた。

木でできた棺が水に浮かんでいたのだ。

自分はその中に寝かされていた。

『うん？』

何かが光つた。

そこに何者かが立っていた。

それは空間の中に光のドアが出来ており、向こう側に立っていた。

『誰だ？』

ドアの向こう側は黄色く光っていた。

その世界にも月はあった。

小さい月が3つ、空で光っている。

マザク

迎えに

来た

それは白装束を全身に被っていた。

どこに顔があるのか、どれが上半身と下半身なのか、まったく区別がわからない。

まるで白いシーツを被った幽霊のようだ。  
それは立って、自分を見下ろしていた。  
『迎えに……何の事だい？』

マザク マザク マザク マザク

自分の名前が連呼される。  
耳鳴りのようにうるさい。

その白装束を眺めるたびに、何か不安な気持ちになっていく。  
確か……これは……噂に聞く……なんだったか。  
頭痛が思考を邪魔して思い出せない。

マザク マザク マザク マザク

お前が

マザク マザク マザク マザク

もうすぐ

マザク マザク マザク マザク

死ぬからだ

「……マザク！」

「うわっ！」

マザクは起き上がると、ベッドに寝かされていた事に気づいた。ベッドの傍には驚いた顔で自分を見つめる若い女性が立っていた。しばらく2人は目を合わせたまま黙ってしまった。

「……どうしたの？」

女性が目を大きく開いた。マザクは汗まみれでまだ女性を見つめていた。着せられていたシャツが汗で濡れ、形のよい胸がくつきりと見えた。

「ここは……どこだい？」

赤い髪の毛が、汗で頬に張り付いている。ただ事ではない雰囲気。女性には目を動かし、言葉を慎重に選んでいるようだ。

「ここは宿屋。昨日アレクとスタットと一緒に酒場に行ったでしょ？　そこであなた、そこにいたお客さんと酒飲み競争を始めちゃったのよ」

後ろ髪を赤いリボンでまとめ、温和な眉に大きな瞳。長い戦いによって肉食獣のように鋭い顔つきになったマザクとは対照的な癒し系美人。リデルが白い魔道着を着てジツとマザクの目を覗いている。

「あゝ、そうだったねえ」

髪をクシャクシャと掻く。すっかり忘れていたようだ。マザクはかろうじて記憶があるので照れた。

「もうっ！今日は仕事のある日なのに変な人と飲んじゃって！危険な仕事なんだからしつかりしてよね！」

リデルはようやくマザクが普段通りに戻ったので、腰に手を当てここぞとばかり愚痴った。マザクは「ごめん、ごめん」と何度も謝った。

「みんな下で待ってるのよ。早く着替えてきてね。前みたいに酔っ払って、下着姿で来ないでよね！」

「わかってるよ」

「ほんとかな……ゴホツゴホツ！」

急にリデルが咳をした。最近特に多い。

「大丈夫かい？」

「うん、平気。それより早くしてよね」

リデルはもう一度「早くしてね」と言うと部屋のドアを閉めた。

「……あたたた」

二日酔いからか頭痛がする。胃も少し炎症を起こしているようだ。喉が異常に渴く。机の上に置いてある水の入ったグラスをグビッと飲んだ。

「ふう、あくなんか嫌な夢見たねえ……。まっ、いいか。さてと、リデルの奴にまた怒られる前に下に降りなきゃね」

服を着替えようとチラツと机を見ると、手紙と写真が置いてあった。写真には3人の男女と1匹の動物が写っている。

「……懐かしいねえ」

右にはマザク、左にはロット、真ん中にはマテリア、その腕に抱かれた猫ミア。パーティを結成した時にとった写真だ。嫌がるロットの襟を掴み、親指を立てているマザクがいる。もうしゃべらなくなったミアを抱えて笑っているマテリアがいる。猫のくせに人の言語が理解でき、ピースをしているミアがいる。マテリアが好きなロットは照れて顔を真っ赤にしている。

「本当に……懐かしい」

写真の隣にあった手紙を手を取った。そこには『親愛なるマザク

様へ』と書かれていた。これを受け取った時は大笑いしたものだ。返事の手紙はすでに出した。

「あいつも大人になったものだよ」

手紙の後ろには『ロット』という名前が書かれてあった。

## 1 - 4 ロットからの手紙

『親愛なるマザク様へ』

元気か？ 生きてるだろうな？ 死んでるかもしれないが、一応手紙を書いておく。生きていたら返事をくれ。

まず一言言っておく。お前本当に馬鹿だな。本物の馬鹿だ。ギルド登録抹消してるだなんてどういうつもりだ？ この馬鹿女。ヘタレ女。女巨人。乳がでかい女は本当に馬鹿だったな。おかげでお前の居場所がわからないので、わざわざ（強調）全ギルド支部に電報をうつてもらった。どうせ定職なんて持てず、マルスオフなんかと戦ってるんだろうから絶対にギルドへは寄るだろう？ じゃないと仕事ないもんな。維持費が馬鹿高いからはやく返事をくれ。わざわざ（強調）マテリアの友達に頼んでもらってるんだ。僕に会ったらまずお礼を言え（強調）。

重大な話がある。いい話だ。そうすれば僕がマテリアと離れて暮らしている理由もわかる。待つてるぞ。

ロット』（「マザクへの手紙」より）

### 《昨日。酒場》

「なぐにが手間賃払えだこの馬鹿ガキ。誰がお前の事を助けてやったと思つてんだよ！ このマザク様だろ〜があ！」

酒を3瓶開け、マザクはすっかり酔っ払っていた。隣にいるハンター、アレクとスタットはそれに付き合わされてしまい迷惑顔で「うんうん」と頷いている。ギルドから手紙を受けとってからずっと

この調子なのだ。

「それに馬鹿馬鹿言い過ぎ！ 馬鹿って言う奴が馬鹿なんです！

そうたる？ アレク？」

「そうだな」

チームのリーダーであるアレクは強制的に同意させられていた。

ここで同意しなければマザクが暴れることを知っているからだ。付き合ってもう何年もたつが、ほとんどマザクの性格を知っている。

「マザクももう飲みすぎだぜ？ もうやめようぜ？」

頬に刀傷のあるスタットが顔を赤くして言った。顔は強面で体格のいいハンターだ。髪も短く、戦闘向きである。

そんなスタットもマザクと一緒にだと必ず酒を飲む。お酒が基本的に大好きなのである。

「そうだな。明日は重要な仕事がある。スタットもマザクも、もうやめておいたほうがいいんじゃないか？」

アレクはクールに言った。髪もスタットよりかは長く、落ち着いた雰囲気のある男だ。冷静で感情的にならない所はリーダーの素質としては十分だった。顔もスタットよりかはいい男である。

「あつ！ リデル！ リデルはどうしたんだよ？」

「彼女は調子が悪い。もう宿屋に帰っている」

「なんだよつ！ 私の酒が飲めないってのかい！ スタット！ 今すぐ連れて来な！」

スタットの顔がみるみる嫌そうに変わった。

「やだよ！ マザクがいけよ！ 彼女俺が行くといつも警戒するよ。うな目で見るから嫌なんだよ！ ちょっと心が傷つくんだよ！」

「それはいつもの事だろ？ 全女性が警戒するっつーの！ お前の事が好きな女は排卵期（この日はホルモンの影響で男らしい人が好きになるらしい）ぐらいだっつーの！」

「チクシヨウ！ おやじ！ 酒くれ！」

カウンターの親父がすぐに酒を持ってきた。その酒をスタットが一気飲みする。目に涙を貯めて。

「2人とももう止めとけ。仕事に影響するぞ」

アレクが2人に注意した。グラスに入れた酒にも手をつけていない。マザクはそれが気に入らない。

「なんだよ。全然飲んでないじゃんか？ 私と酒を飲むのが嫌いなのかい？」

酒臭い息を吐きながら、マザクはアレクの肩を抱いた。酒を飲むといつもこれなのである。アレクはすっかり慣れていた。

「俺は遠慮するよ。こんなことで命を落としたくはないからな。…お前はまだいい」

「えっ？ 最後。最後の言葉が聞こえなかった？ すっごい嫌味に聞こえたけど聞こえなかった？」

「フツ、お前が羨ましいよ」

アレクはグビツと手に取った酒を飲みほすと、席を立った。

「先に出る。マザクはともかくスタットは早く帰って来い。お前はそんなに酒が強くないからな」

「なんだよ！ リデルか？ リデルの所に行くのか？」

「そうだ。ちよつと見てくる」

「そっからすごい事になるんだろ？ チクシヨウ！」

「フツ、さあな」

思わせぶりな顔で笑うと、アレクはその場から去っていった。

「なんだよ。アイツ……」

残されたマザクとスタットは同時に酒を注文した。ふと、マザクはリデルのことが気になった。

「リデルの奴……アイツ結婚してないんだろ？ このままじゃ婚期逃しちゃうんじゃないかい？」

「アレクがいるだろ？ それを言うならお前はどうかんだよ？」

「なんかさ、こうピンと来ないんだよね」

「訳わかんねーよ。それを言うなら俺もどうしようかな」

「おっ？ おっ？ どうしたスタット君？ 何か悩んでるのかい？」

さっそくマザクがスタットに絡んできた。スタットは素直に悩み



を呟いた。

「もうハンターなんてやっていけねえよ。軍試験落ちちまったし、体力勝負の所は年齢制限に引つかかるし。かといってハンターやってても不安定だし。明日の仕事成功したら大量の報酬金が出るからそれ持って実家帰ろうかな……」

「何リアルな話してんだい。もつと変態的で面白い話をしないか」  
マザクは興奮めした。

「出来るか!」

「そんな事言うんなら私だって言っちゃうよ? いいのかい?」

「おゝいえいえ。机は壊すなよ」

「それなら遠慮なく……」

マザクは息を吸い込んだ。そして酒をグビツと飲んだ。

「ヴィンセントはどこにいるんだああ!」

「ドンツ!」と酒瓶を机に叩きつけた。店の客全員が2人に注目した。

「あゝすつきりした。どこにいるんだよヴィンセント。もう隠れてないで出て来いよ」

「なあ。聞きたかつたんだが……ヴィンセントって誰?」

「私の友達の恋人さ。ずっと探してるんだけどねえ。まったく情報がないし、どこにいるのかもわかんないし」

「顔写真とかあるのかよ?」

「ない! だけど私が覚えている!」

「どんな顔なんだ?」

「チラッと見たただけだけどさ。すごくいい男!」

「わかるかそんなんで!」

「私が見ればわかるんだよ! もう忘れられないからさ! 私の心

にキューピットの矢がブチ刺さってるんだよ！」

「引っこ抜いてもらえ。そして出血多量で死ね」

スタットが「やれやれ」とグビツと酒を飲んだ。

「ロツトって奴の手紙に書いてなかったのか？ ヴインセントの情報が？ 手紙を貰った時のお前かなりはしゃいでたみたいけど？」

「まったく書いてねえ。むしろ出し惜しみしてやがるよ。『いい事』ってなんだよ？ 本当に。明日の仕事が終わって、会いに行った時にビシツと言ってやらないとね」

「ほほう。なんて？」

「今生きてるのは私のおかげだ！ ってね」

「あゝ最悪だね。それ言ったらもう向こう様はすぐに悪口で反論してくるね。手紙の文体から予想するに」

「ははっ！ そうだろうね！ それでいいんだよ」

マザクは嬉しそうだ。恐らく、これがマザクとロツトのやり取りなのだろう。スタットはそう思った。

「それにしてもお前はすごいよ」

「へっ？ 何がさ？」

「そんな曖昧な目的のために旅をしていることがさ。俺は帝軍試験に受かるため、アレクは国軍に入隊するコネをつくるため、リデルは人を救いたいという思いのため。誰もが具体的な目的を持ってハンターなんてやってんの。お前はその男を捜すために人生を浪費している」

「浪費って……」

「浪費さ。目的が叶わなかったら今までの過程なんて浪費以外なものでもねえよ。でもお前が次の仕事でハンター辞めると聞いた時は驚いたけどな」

「……そうかい」

もう何度も話し合ったことだ。マザクがハンターを辞めることをアレク、リデル、スタットは知っている。つまり、このチームから抜けるのだ。

それで今回はみんなで飲みたかったのだ。だが、真面目なりデルとアレクはまったく乗ってこない。乗ってきたのはスタット1人だけである。

「まあでも、私は浪費してるって気はしないね」

「考え方の違いだろ？」

「そうかもしれないね。確かに途方もない目的さ。この広い世界の中で1人の男を捜すってんだからね」

酔っているためマザクの頬が赤い。それでも意思はしっかりとしている。強い目が真っ直ぐ天井を見つめる。

「それでも探すんだよ。それが私の生きる意味なんだからさ」

後悔はしていない。そんな強い意志をスタットは感じ取った。少し目線をマザクから逸らした。

「そうかい。まあお前がそんなに言うなら止めはしないさ。お前のおかげで俺達は助かったからな。まさかあの有名な『ホーリーランス』の使い手が仲間になってくれるとは思わなかったしな。おかげで高額賞金のマルスオフやエコーズを倒す事ができた」

「感謝しな！ ふふ〜ん」

「そしてこんなに大酒飲みだとは思わなかったよ。今夜が最後になるかもしれないね。　飲みまくるぜ！」

「最後だなんて寂しいこと言うんじゃないよ。　だけど飲みまくってやるうじやないさ！」

「だはははは！」と2人は笑いあつた。  
ゴトツ

飲みあっている2人の後ろで人影がさした。2人だ。

(ねえねえ。早く。早くブツダ声をかけてよ)

(なぜ俺がせねばなんのだ？　自分が声をかければよかるう?)

(できないから言ってるんじゃない！　もう緊張してるのよ！　ほらっ、手がもうねちよねちよ！)

(めんどくさい事だな。お礼に下着はもらっぞ)

(やるか！)

「……うんっ？ なんだい？」

マザクが後ろを振り向くと、2人の男女が立っていた。

1人は肩まで黒髪をのばした女。セミロングの髪型に服装は白のブラウス。スーツスカートから黒いタイツが見える。スーツの上から薄い黒いコートを羽織っていた。白い宝石のついた十字架のネックレスがよく目立つ。

もう1人は茶色の肌に額にホクロがある男だった。巻き付け型の茶色いトーガを着ている。髪は黒く、少し長めの角刈りをしている。一見すると聖職者のようである。

2人とも両手に黒の皮手袋をしている。

「少し尋ねたいことがある」

「なんだよ？」

マザクは酔った目で男を見上げた。

「お前はマザクという名前ではないのか？」

「そうだけど？」

「ホーリーランスの使い手の？」

女が我慢できなかつたのか割り込んできた。

「そうだよ」

「やはりな」

女が男の隣で「ほらほら！」と興奮している。

「俺の名前はブツダという。こっちの女はフジコちゃんだ」

「フジサキです！」

「ブツダに……フジコちゃんだね？」

「フジサキです」

「ふむ」とブツダが唸った。どこかマザクを値踏みしている。

「私になんか用かい？」

「うむ、そうだな。とりあえず下着をくれないか？」

「適合したの！？」 自分の基準と適合したのね！」「フジサキがブ

ツダに突っ込んだ。

「わかった。妥協して今はいてる下着でいい」

「どこが妥協してんのよ！ むしろ基準上げてんじゃん！」

「なんだいあんた等？ 下着泥棒？」

「ちっ、違います。私達はあなたのファンなんです！ てゆうか愛してます！」

フジサキが慌てて弁解した。顔が真っ赤になっている。

「へへ。私も有名になったもんだ。でも愛してるとは言い過ぎだよ」

マザクにとつては慣れたものだ。S級犯罪者、ゴキブリを倒したことですっかり有名になつてしまっている。現に酒場にいた客もヒソヒソとマザクを指差して話し始めた。

（かっこいい）。野獣系だわ。野獣系美人だわ。男性ホルモンがものごつつ濃い外資系OJだわ）

フジサキの興奮が全身を駆け巡る。

「そっその、わわわわ私……」

「ちょっと待った！！」

酒場の奥から男が叫んだ。ノツシノツシとやってきた男は背が高く、筋肉質で……全身白タイツだった。その巨人のような姿と、タイツの股から出ている巨根にフジサキは「ひいいいっ！」とブツダの後ろに隠れた。

「マザクだと？ 貴様、マザクと言うのか？」

男は上から目線で名前を確認する。マザクは「そっだよ」とぶっきらぼうに答えた。

「なんと、これは運命か……」

男は首を振った。

「我が名は帝国軍第四類所属、雲鏡！」

男が大声で自分の名を名乗った。周りのザワメキが一層際立ってきた。観客の1人が「大帝国の軍人か？」と呟くのを、ブツダは聞

き逃さなかった。

「へ〜軍人さんがこんな私に何の用だい？」

マザクは余裕なのかまた酒を口に運ぶ。酒場の客のヒソヒソ話がブツダの耳に入った。

「おい、あのタイツ。以外にマトモだぞ。しかも帝軍だし。俺、隅の方で酒飲んでいるアイツと目が合ったとき『喰われる!』って思ったのに。もう目を合わさないようにものすごく気を使ってたのに」「てか、あの白タイツ。股に何か隠してるぞ？ なんだあのでかさは？ 棍棒でも隠してやがるのか？」

「外人じゃ！ 外人が植民地支配にやって来おった！ 女を隠せ！」

客は好き勝手に話を拡張させていた。

「めちゃくちゃな言われようだな」

ブツダが少し雲鏡に同情した。

「お前は我が妻にふさわしい」

「えっ？ なんだって？ 聞こえなかったけど？」

「私と結婚してもらおう！」

シーンと誰もが静かになった。マザクは「ヒック！」としゃっくりした。

「ちなみにもし我が願いを断るといふのなら……力づくで我が物とする！」

雲鏡の全身から有無を言わさぬオーラが舞い上がる。有言実行。間違いなく冗談ではない。

「ちよちよちよ、ちよつと待った!!」

フジサキが急いで手を挙げた。あまりの男の理不尽な要求に我慢できなかったようだ。それでもしつかりとブツダの後ろには隠れている。

「なんだ貴様は？」

「あなた！いきなり何言ってるの！アソコがでかいからっていい気にならないでよね！」

「ごく普通の事を言っている。私の仕事は非常に危険が伴う。ゆえに強い女が必要なのだ。あの『ホーリーランス』の使い手となれば申し分ない」

「認めないわ！マザク様は私のものよ！誰があんたみたいなチコでか男おに渡すものですか！」

雲鏡は「なっ！」と開いた口が閉じられなかった。

「なんとこの破廉恥か！女が女を好きになるだど！？そんな神をも恐れぬ行為！許してはおけぬ！」

ブツダは「チコでか男おには反応しなかったな」とつい突っ込んでしまった。マザクは「認めてんじゃね？」と笑った。

「まあ言い合うのはかまわんが、俺を間に挟むのはやめてくれんか？」

フジサキは雲鏡が怖いのでブツダの後ろで文句を言っている。雲鏡もブツダに構わずまくしたてる。ブツダにとってはいい迷惑だった。2人の睡が一斉に飛んでくるからだ。

「女の分際で生意気な！貴様は黙って我とマザク殿を祝福していればよいのだ！」

「全身タイトスの分際で私の邪魔をする気？だいたい何よその格好おば」なの？「おば」のコスプレ？」

「失礼な！これは戦闘服だ！このタイトスと我はもはや一心同体。なくてはならぬものなのだ！」

「なんて残念な格好かしら？タイトスが一心同体だなんて終わってるわ。私なら自殺するわね。あんたみたいな人にマザク様の魅力は

わからないのよ！」

「貴様に何がわかる！ 彼女がはいているムチムチした黒タイツがすごく素敵だということを！」

「その着眼点には敬服するわ！ だけどね。私はマザク様の頬を赤く染めてグラスを掲げる所がたまらないのよ！ もう興奮して鼻の血管が切れてるしね！」

「なんとっ！？ 貴様もそこに反応したというのか！？」

「それにスタイルだっていいし、顔だってキリッとしていて素敵！ そりゃ確かに癒し系でもないし、童顔でもないわ。だけど大人の女の魅力に頼りたいっていう気持ちが抑えきれないのよ！ もう首を手でクイツしてもらいたいのよ！」

「そこまでマザク殿を観察しているとは……しかしお前に渡すわけにはいかぬ！ だってぶっっちゃけ私の好みだからだ！」

「私なんて愛しちやってるのよ！」

ブツダは「うむ。愛は性別を超えるのだ」と頷いた。

「ははっ！ 私もモテモテだねえ」

マザクはまんざらでもない。赤い髪を魅惑的にかきあげる。

「……てかつ、変態達に好かれてんだぞ？ お前」

スタットは呆れ顔だった。

「まちな！」

マザクが2人の喧嘩を止めた。2人は口喧嘩をやめてマザクに注目した。

「喧嘩はやめて公平平等な方法で決着をつければいいじゃないか」

その言葉にスタットは「またか……」と頭を抱えた。

「酒で決めようじゃないか……！」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2573w/>

---

帝国物語外伝 ～赤髪のマザク～

2011年12月4日23時54分発行